

大正・昭和初期の上方芝居番付四十三種

秋本鈴史

神戸松蔭女子学院大学文学部

ここに紹介するのは、大正八年から昭和三年までの十年間の大阪の芝居の絵入役割番付など演劇資料である（一点のみ京都を含む）。本学図書館に寄贈するにあたり、目録と共に簡単な資料の紹介を行い、近代歌舞伎・近代演劇・芸能の研究資料として今後活用されることを願う次第である。

江戸期から近代にかけての芝居番付については、すでに早稲田大学演劇博物館や日本大学総合学術情報センター・東京大学国文学研究室などから膨大な目録が公開されており、また関西歌舞伎についても、関西大学・阪急学園池田文庫・大阪府立図書館などから詳細な目録が刊行されている。さらに明治以降の資料を網羅整理して『近代歌舞伎年表』（八木書店刊）として大阪編・京都編が刊行されており、名古屋編も現在刊行中である。こうした中で本目録を紹介するのは、この資料が個人のコレクションであり、実際に見た舞台の記録と推定され、その時代の生きた演劇資料であると考えるからである。また収集された期間が歌舞伎や近代演劇にとって、興味深い時期に相当することも理由の一つである。以下、主に三つの側面を中心にして本資料について紹介を試みた。

一つはこの時期、東京の歌舞伎界が歌舞伎座を中心に災害で混乱していたことであり、もう一つは近松門左衛門の二百年忌の記念行事の時期にあたることである。ともに関西の演劇界にとっては大きな出来事であり、それを一人の観客の立場から知ることができるのである。さらに三丁目として歌舞伎と大衆演劇・活動写真（映画）などとの関係などについても資料から考えたい。

まず東京の歌舞伎座であるが、大正十年（一九二一）十月三〇日、漏電によって焼失する。この歌舞伎座は明治二十二年（一八八九）に福地桜痴らによって演劇改良運動の象徴として建築された洋風建築の第一期歌舞伎座を、明治四十四年（一九一一）にルネッサンス式建築として開場した帝国劇場に対抗するため、四ヶ月かけて和風で大改装した第二期歌舞伎座である。大正二年（一九一三）に歌舞伎座の経営権を手に入れた松竹の大谷竹次郎は直ちに再建に取りかかり、大正十一年（一九二二）六月着工、建物がほぼ完成していた翌大正十二年九月一日、あの関東大震災が起り、歌舞伎座は再び灰燼に帰す。第三期歌舞伎座は、大正十三年（一九二四）十二月竣工、翌十四年正月にこけら落とし興行が行

われた。すなわち、歌舞伎座は大正十年十一月から十三年十二月まで、三年二ヶ月の間、興行を行うことができなかった。

本資料が残る時期の関西歌舞伎は、六十歳代の中村鴈治郎（初世）を中心として、三十歳半ばから四十歳代の実川延若（二世）が活躍していた。本資料での中村鴈治郎の出演は、菊池寛作の『藤十郎の恋』の初演（資料5）を含め九興行、実川延若は七興行である。また鴈治郎の相方の女形として最晩年の小梅玉（二世・大正十年没）、その養子中村福助（高砂屋四世・後の三世梅玉）、中村魁車があり、その他中村雀右衛門（三世）嵐吉三郎（六世）尾上多見蔵（三世）市川右團次（二世）、それに後に十二世片岡仁左衛門となり不幸な死を遂げる片岡我童（四世）もまだ三十代後半から四十歳代のころで一座することが多かった。片岡仁左衛門（十一世）は当時東京で中村歌右衛門（五世）市村羽左衛門（十五世）と「三衛門」と呼ばれ活躍をしていたが、同世代の鴈治郎とは歌右衛門襲名をめぐる確執もあり、松嶋屋一門は松竹系でない天満八千代座に出ることが多かった。『仮名手本忠臣蔵』の舞台で「写真連鎖」と称して「活動写真」のフィルム出演したこともあるが（資料32）、これが一種の連鎖劇としても、関西の舞台には立ちにくい環境にあったと推定される。

その関西歌舞伎に東京の役者が目立って出演するようになるのは、歌舞伎座が焼失した後の大正十一年である。しかしながら、本資料に残るのは、松竹所属の歌舞伎座専属役者ではない役者たちであった。その代表が尾上菊五郎（六世）である。菊五郎は市村座の舞台で中村吉右衛門（初世）と菊吉時代といわれる一時代を築いていた。が、仕掛け人であった田村成義は前々年の大正九

年になくなり、ライバルの吉右衛門も大正十年に市村座を離れた。そんな中、大正十一年六月に菊五郎が、大谷友右衛門（六世）・市川男女蔵（四世・後の三世市川左團次）らと中座に出演したのは大きな話題であった。菊五郎はまだ三十歳代半ばではあったが人氣は突出していた。当時の新聞などではその動向が詳細に報道されていたが、本資料でも絵入役割番付の他、口上の小番付や「鏡獅子」の絵入小番付が残る（資料15・図版1参照）。

一座で浪花座に乗り込んだのは市川猿之助（二世・後の初世猿翁）である。当時これも三十歳代の猿之助は前々年の大正九年に「春秋座」を結成、欧米留学の経験を踏まえ独自の活動をしていた。浪花座での十一月公演も「春秋座公演」と銘打ち、その番付も赤色で、外題の「妖霊星」や「虫」と共に特に目を引くものである（資料21）。

当時帝国劇場専属であった役者が出演した番付も残る。大正十一年二月中座には、後の高麗屋三兄弟の父、松本幸四郎（七世）と澤村宗十郎（七世）が鴈治郎と一座する（資料13）。また翌大正十二年三月の中座には、これも帝劇専属で女形として名高い尾上梅幸（六世）が鴈治郎と一座する（資料22）。

これらの動向にも歌舞伎座焼失が関係すると推測されるが、その他にもいくつか動きがある。大正十一年一月に、片岡仁左衛門（十一世）が天満八千代座改築落成記念の興行に出演している（資料12）。これは特別興行のためであるが、坂東三津五郎（七世）や片岡千代之助（後の十三世仁左衛門）も同座している。また同年五月中座では市川中車（七世・前名七世市川八百蔵）が鴈治郎と一座（資料14）、その後十一月には延若とも一座（資料20）、翌



図版 1

年にまた鴈治郎とも一座する（資料24）。仁左衛門や中車は上方にゆかりある役者ではあるが、これらも歌舞伎座焼失と関係があるのではないかと考えられる。

しかし本資料では関東大震災の大正十二年九月以降の芝居番付はしばらく見られず、以後に残る芝居番付の内容にも大きな変化がみられる。上方歌舞伎そのものは、震災の影響で東京の役者が数多く来阪し活況を呈していた。鴈治郎と仁左衛門の共演（大正十二年十一月・中座）や、「菊吉」のもう一人、中村吉右衛門（初世）の二十五年ぶりの来阪（大正十三年十一月・中座）、また当時の歌舞伎の中心にあった中村歌右衛門（五世）と鴈治郎・仁左衛門が共演した『熊谷陣屋』（大正十五年・中座）などもあったが、本資料にはそれらの番付は見られず、旧蔵者が大きな災害を前に観劇からしばらく遠ざかり、その後に見る芝居の方向性も変わっていったことが想像される。

次に近松門左衛門の二百年忌の記念行事との関係について紹介する。近松は享保九年（一七二四）十一月二十二日に七十二歳で亡くなる。大正十二年（一九二三）が二百年忌にあたるが、大阪朝日新聞社主催の近松二百年祭記念行事は、前年の大正十一年に集中する。実際の行事は記念講演会や展覧会や法要、それに全集の刊行など多彩であったが、本資料に関係するのは懸賞脚本と記念興行である。

懸賞脚本は野外劇（ページェント）と世話物、それに浄瑠璃院本の三種で募集されたが、野外劇では当選作はなく、世話物脚本で『二の檜』と『淡路町心中』の二編が当選した。また浄瑠璃院

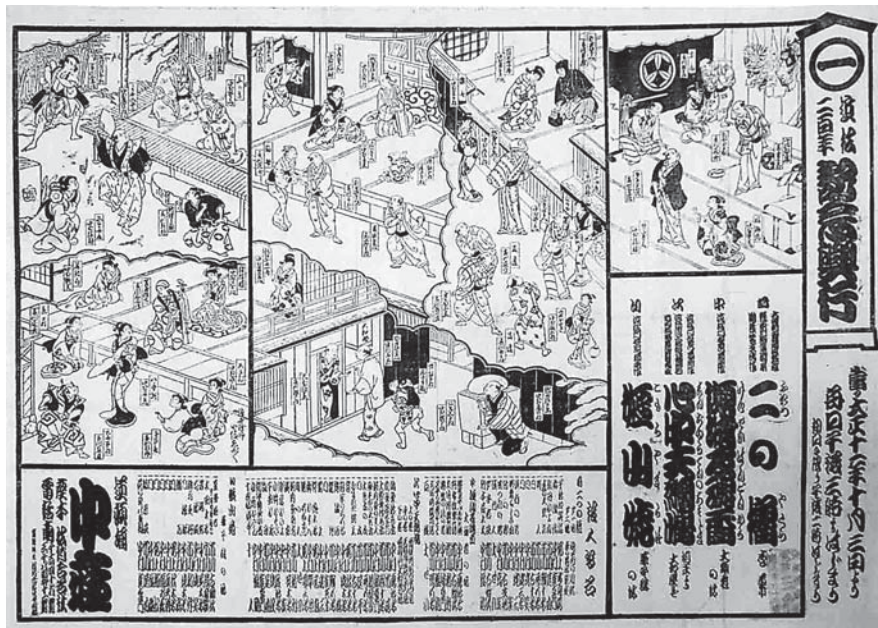
本では『聚楽の栄華』が当選した。これら当選脚本の上演は記念興行で行われたが、本資料ではそれらの番付が残る。

大正十一年（一九二二）十月三日から中座で「近松二百年記念興行」として中村鴈治郎を中心にした興行が行われた（資料18・図版2参照）。その最初に「近松記念懸賞当選脚本」として『二の檣』が中村雀右衛門・中村福助・尾上多見蔵らによって演じられた。他の演目は『傾城反魂香』『心中天網島』『囀山姥』であるが、中でも『心中天網島』は三月の「巢林子原作上演研究会」で選定し、「同研究会脚色」としてメンバーでもあった「竹内栖鳳画伯舞台意匠」として上演されたものである。

また浄瑠璃でも、同年十月二十日より御霊文楽座で「近松二百年記念興行」が行われた。『聚楽の栄華』は「大阪朝日新聞社近松記念懸賞当選脚本」として竹本津太夫（三世）・竹本叶太夫によって上演された（資料19）。他の演目も復活上演の『釈迦如来誕生会』と『博多小女郎波枕』であり、番付も江戸時代の二枚番付を復活し、上半分には長谷川小信の挿絵が入る。

この浄瑠璃『聚楽の栄華』は翌月の十一月に、中座で実川延若・市川中車で歌舞伎としても上演された（資料20）。ただしこの公演は近松の記念興行ではなく、「極附播随長兵衛」が主演目の興行と考えられる。

世話物脚本のもう一つの当選作品『淡路町心中』は、翌大正十二年五月に中座で中村鴈治郎・市川中車・中村福助らによって上演される（資料24）。これも近松記念興行ではないが、一番目に「近松門左衛門原作 大森痴雪脚色」として『傾城酒顔童子』を上演しているので、これは近松を看板にした興行であろう。



図版 2

以上が「近松二百年興行」関係資料であるが、記念興行など懸賞入賞脚本の上演が網羅されており、旧蔵者が熱心に観劇したことが想像される。大正十一年の大阪の劇場街は東京からの役者の来演に加え、近松二百年記念興行も重なり活況を呈しており、本資料でもこの年には十興行の番付が残されることになった。

関東大震災以後、残る番付には大歌舞伎のものがほとんどなくなる。大正十五年（一九二六・昭和元年）から翌昭和二年（一九二七）にかけての資料は、焼失前の御霊文楽座での文楽を除くと大半が関西青年歌舞伎のもので、それに剣戟や新国劇や曾我廼屋五郎劇などが加わり、旧蔵者の好みがより大衆的な芝居へと移っていったことが推定される。

その中で目を引くのは大正十五年二月十六日から十日間、浪花座で澤田正二郎らによって上演された新国劇、『白野弁十郎』である。（資料29・図版3参照）。この戯曲は「エドモン・ロスタン氏原作・楠山正雄氏訳・額田六福補訂」とあるように、フランスの「シラノ・ド・ベルジュラック」を翻案したもので、番付の右上隅に「今春の一大試みとして……東都の春興行に演じて幸ひ稀有の好評を集めました」とあるように、一月に東京の邦楽座（後の映画館「丸の内松竹」・現在の「丸の内ピカデリー」）で初演されたものである。それを翌月に大阪浪花座で上演した時の番付であり、新国劇の、あるいは澤田正二郎の代表作となる芝居の大阪初演時の記録という貴重な資料である。

資料の中で異質なのが昭和三年（一九二八）七月、浪花座の「活動狂時代・女中難・鬼あざみ・ウムベルト・ノビレ」の番付であ



図版 3

る(資料41・図版4参照)。番付というより後のパンフレットに近いものでもあり、従来の歌舞伎番付の形式とは異なる。『近代歌舞伎年表・大阪編』の記載は大阪朝日新聞広告によるものであり、本資料によって詳細が判明する。これが他の歌舞伎番付資料と一緒に整理されているのは、おそらく主演の林長二郎のためであろう。長二郎はその後二枚目スターとして長く活躍する長谷川一夫のことであるが、以前は中村鴈治郎の元で林長丸として歌舞伎の舞台に立っていた。本資料にも林長丸として出演した記録が大正八年から残る(資料2)。同年十月・浪花座での鴈治郎による『藤十郎の恋』の初演にも「色子」の一人として出演している(資料5)。大正十年頃には中村扇雀(初世・後の二世鴈治郎)を中心とした青年歌舞



図版4

伎に移ったようであり(資料8・16・25)、その後松竹の白井松次郎に見出され、昭和二年に「林長二郎」と改名し映画に出演する。その改名後に俳優として浪花座の舞台に立ったのがこの番付である。

大正十年以後に林長丸と同じ舞台に立っていた役者に市川右一がいる(資料8・16・25)。大正十年六月中座の『長曾禰虎徹』で長丸が「小姓金弥」、右一は「腰元おてる」(資料8)、大正十二年七月中座の『五大力恋緘』では長丸が「小女おまつ」、右一は「喜集院喜平太」(資料25)など、どちらも端役である。この市川右一が、「旗本退屈男」で知られる後の時代劇映画スター市川右太衛門(北大路欣也の父)の若き日の姿である。右一は『五大力恋緘』の翌々年の大正十四年に映画界に入り、市川右太衛門に改名する。またこの大正十二年の舞台(資料25)に市川百々之助も出演していたが、これもこのころ映画界に入り、全盛期には阪東妻三郎と人気を二分し「ももちゃん」の愛称で知られた市川百々之助の青年歌舞伎時代の最後の姿であった。

また大正十一年一月、片岡仁左衛門と天満八千代座に出演していた片岡千栄蔵も、この後映画に転じ、剣戟スター「片岡知恵蔵」として長く活躍する(資料12)。またこの片岡知恵蔵と並ぶ大スター、「あらかん」の愛称で知られる嵐寛寿郎もまた青年歌舞伎の出身で、本資料に多く名前を残す。大正十五年四月の松島八千代座に「嵐和歌太夫」の名で出演し(資料30)、以後同年五月松島八千代座(資料31)、同年同月天満八千代座(資料32)、昭和二年三月天満八千代座(資料35)に出演しているのが確認できる。母方の祖父が明治期を代表する女形人形遣いの桐竹紋十郎(初

世)、叔父が嵐徳三郎(六世)であり、関東大震災後に関西に帰った徳三郎の一座に加わったころの番付である。しかし片岡知恵蔵や市川右太衛門らの映画入りに刺激されて昭和二年には映画の世界へはいる。昭和二年三月天満八千代座の舞台(資料35)が歌舞伎役者「嵐和歌大夫」としての最後の姿であったのかもしれない。

大正末年は日本芸能史の転換点でもあった。多くの若手歌舞伎役者が新天地を求めて歌舞伎から去り、活動写真の世界に入っていく時代であった。片岡知恵蔵・嵐寛壽郎・市川右太衛門・市川百々一夫の歌舞伎役者時代と映画俳優になったばかりの姿が確認できるなど、本資料は時代の情報を映すものともなっている。

本資料を時代順に並べて最後になるのは、唯一の京都の資料である。昭和三年(一九二八)十月、京都南座の中村扇雀中心の青年歌舞伎の舞台であった(資料43)。が、旧蔵者の関心は青年歌舞伎だけにあつたのではないであろう。当時の人々の目は京都に注がれていた。それは、天皇(昭和天皇)の即位式である「御大典」が十一月十日から京都御所で行われることになっていたからである。「大札記念京都大博覧会」が開催されるなど、賑わう京都の町の中で時代は確実に昭和に向かっていたのである。

以下、本資料の目録を掲載する。

- ① 資料は年代順に配した。特に注記しない限りは絵入役割番付である。
- ② 記載の一行目は、初日の年月日・千秋楽の月日・上演劇場である。ただし番付に千秋楽が記載されないものが多

く、『近代歌舞伎年表』に記載されている新聞記事引用のものなどは括弧付きで記した。

- ③ 次に上演演目と、主な出演役者名を【演目】【役者】として記載した。

- ④ 当該資料の翻刻などが記載される『近代歌舞伎年表』『義太夫年表』など資料の掲載巻と頁数を記した。

- ⑤ 最後に神戸松蔭女子学院大学図書館の請求番号(七七四〇/二二七/X等)を括弧入りで記した。

- ⑥ 同一興行で、役割番付以外の小番付がある場合には、下位分類とし、〇―1、〇―2として整理した。

- ⑦ なお本資料以外に、旧蔵者が一緒に保管されていた写真帳二冊も図書館に寄贈したが、詳細の紹介は別の機会に行いたい。『大正・昭和初期の上方歌舞伎役者写真帖1・2』(請求番号七七四〇/二二八/1・2)。

- ⑧ 本資料を寄贈するにあたり、丁寧で完璧な補修を担当していただいた工房レストア、および代表の平田正和氏に感謝する。

- ⑨ 本資料について種々配慮いただいた本学図書館職員の方々に感謝する。

1 大正八年(一九一九) 四月一日〜(四月二日) 中座

【演目】 出世景清・仙台・楼門五三桐・文七元結・小鍛冶/月大漁

【役者】 実川延若・市川右團次・嵐璃寛・実川八百蔵
歌舞伎年表大阪編・六巻・三七〇頁

- 2 大正八年(一九一九) 五月六日(五月二十七日) 浪花座
 (七七四/二二七/二)
 【演目】鎌倉右大臣・伊賀越道中双六・随市川鳴神曾我・花吹雪春諷・本朝廿四孝
 【役者】中村鷹治郎・中村梅玉・中村福助・中村雀右衛門
 歌舞伎年表大阪編・六卷・三七九頁
 (七七四/二二七/二)
- 3 大正八年(一九一九) 六月二日(六月二三日) 中座
 【演目】貞任宗任・艶姿女舞衣・裏ぎり・籠釣瓶花街酔醒
 【役者】実川延若・中村雀右衛門・嵐吉三郎・市川小團次
 歌舞伎年表大阪編・六卷・三八七頁
 (七七四/二二七/三)
- 4 大正八年(一九一九) 七月八日(七月二十九日) 浪花座
 【演目】生写朝顔日記・葡萄の酒・心中刃は氷朔日・伯爵主/三人生酔
 【役者】中村福助・片岡我童・尾上多見蔵・市川右團次
 歌舞伎年表大阪編・六卷・三九八頁
 (七七四/二二七/四)
- 5 大正八年(一九一九) 十月八日(十一月二日) 浪花座
 【演目】青葉しぐれ・増補忠臣蔵・藤十郎の恋・伊勢音頭恋寝刃
 【役者】中村鷹治郎・中村魁車・中村雀右衛門・尾上多見蔵
 歌舞伎年表大阪編・六卷・四二二頁
 (七七四/二二七/五)
- 6 大正九年(一九二〇) 八月一八日(八月二十八日) 浪花座
 【演目】怪談敷島譚
 【役者】実川延若・嵐吉三郎
 歌舞伎年表大阪編・六卷・五三八頁
 (七七四/二二七/六)
- 7 大正十年(一九二二) 五月五日(五月二十六日) 中座
 【演目】小野道風青柳硯・和歌の浦・お夏清十郎・勢獅子
 【役者】中村鷹治郎・中村魁車・中村福助・市川右團次
 歌舞伎年表大阪編・六卷・六二五頁
 (七七四/二二七/七)
- 8 大正十年(一九二二) 五月三十一日(六月十五日) 中座
 【演目】長曾禰虎徹・蛙・雪のふる夜・灘の阿久屋・元禄ひな形
 【役者】片岡秀郎・中村扇雀・中村福太郎
 歌舞伎年表大阪編・六卷・六三四頁
 (七七四/二二七/八)
- 9 大正十年(一九二二) 七月三十一日(八月二日) 浪花座
 【演目】荒木又右衛門・波瀾宇和島
 【役者】実川延若・嵐吉三郎・尾上卯三郎・中村紫香
 歌舞伎年表大阪編・六卷・六五四頁
 (七七四/二二七/九)

- 10 大正十年(一九二二) 十月二日(十月三日) 中座
 【演目】二葉葵・俊寛・歌仙の容彩・暹羅船・若木仇名草
 【役者】中村鴈治郎・中村福助・中村雀右衛門・嵐吉三郎
 歌舞伎年表大阪編・六卷・六七三頁
 (七七四/二七/一〇)
- 11 大正十年(一九二二) 十一月五日(十一月二六日) 浪花座
 【演目】大久保彦左衛門・腰越・一節きり・鬼一法眼三略卷
 【役者】片岡我童・市川右團次・尾上卯三郎
 歌舞伎年表大阪編・六卷・六八四頁
 (七七四/二七/一一)
- 12 大正十一年(一九二二) 一月一日()
 天満八千代座(改築落成開業祝)
 【演目】寿式三番叟・千代春金峰顔揃
 妹背山婦女庭訓・出世の花槍/狂乱雲井袖・曾我・三日月・奴道成寺
 【役者】片岡仁左衛門・片岡千代之助・片岡我童・市川右團次・坂東三津五郎
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五頁
 (七七四/二七/一二)
- 13 大正十一年(一九二二) 二月四日(二月二六日) 中座
 【演目】菅原伝授手習鑑・思出川・大森彦七・京新染・黒手組助六・寿靱猿
- 14 大正十一年(一九二二) 五月七日(五月二八日) 中座
 【演目】伊賀越道中双六・颯風・唐人話・女鳴神
 【役者】中村鴈治郎・市川中車・林長三郎・中村福助
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五二頁
 (七七四/二七/一四)
- 15-1 大正十一年(一九二二) 六月三日(六月二七日) 中座
 【演目】坂崎出羽守・増補手習鑑・鏡獅子・神明恵和合取組・吉原雀
 【役者】尾上菊五郎・大谷友右衛門・市川男女蔵・尾上栄三郎
 歌舞伎年表大阪編・七卷・六三頁
 (七七四/二七/一五-一)
- 15-2 同右公演 小番付(口上)
 歌舞伎年表大阪編・七卷・六三頁
 (七七四/二七/一五-二)
- 15-3 同右公演 絵入小番付(鏡獅子)
 歌舞伎年表大阪編・七卷・六三頁
 (七七四/二七/一五-三)
- 16-1 大正十一年(一九二二) 七月二日(七月一六日) 中座
 【演目】伊達の聞書・祇園精舎・増補忠臣蔵・素町人・團扇売

- 【役者】 中村扇雀・中村魁車・嵐珪蔵
歌舞伎年表大阪編・七巻・七五頁
(七七四/二二七/一六一二)
- 16 | 2 同右公演 小番付(口上)
歌舞伎年表大阪編・七巻・七五頁
(七七四/二二七/一六一二)
- 17 大正十一年(一九二二) 九月六日(九月二六日) 浪花座
【演目】 馬土地獄・御用船・なだれ雲
【役者】 市川右團次・嵐吉三郎・尾上卯三郎・岩井叅三郎・喜多村緑郎
歌舞伎年表大阪編・七巻・九四頁
(七七四/二二七/一七一七)
- 18 大正十一年(一九二二) 十月三日(十月二七日) 中座(近松二百年記念興行)
【演目】 二の櫓・傾城反魂香・心中天網島・姫山姥
【役者】 中村鴈治郎・中村雀右衛門・中村福助・市川右團次
歌舞伎年表大阪編・七巻・一〇七頁
(七七四/二二七/一八)
- 19 | 1 大正十一年(一九二二) 十月二〇日(十一月二日) 御霊文楽座 太夫三味線番付(近松二百年記念興行)
【演目】 釈迦如来誕生会・聚楽の栄華・博多小女郎波枕
【役者】 (竹本越路太夫)・竹本源太夫・竹本津太夫・豊竹古鞆太夫
義太夫年表大正編・一七四頁
- 19 | 2 同右・人形番付
義太夫年表大正編・一七四頁
(七七四/二二七/一九一二)
- 20 | 1 大正十一年(一九二二) 十一月五日(十一月二六日) 中座
【演目】 聚楽の栄華・寿しや・人非人・極附播隨長兵衛
【役者】 実川延若・市川中車・中村魁車・片岡我童
歌舞伎年表大阪編・七巻・一二〇頁
(七七四/二二七/二〇一二)
- 20 | 2 同右公演 小番付(口上)
歌舞伎年表大阪編・七巻・一二〇頁
(七七四/二二七/二〇一二)
- 21 大正十一年(一九二二) 十一月九日(十一月二三日) 浪花座(春秋座公演)
【演目】 妖霊星・虫・小栗栖長兵衛・踊供養
【役者】 市川猿之助・市川八百蔵・中村翫右衛門・市川段猿
歌舞伎年表大阪編・七巻・一二二頁
(七七四/二二七/二二)
- 22 大正十二年(一九二三) 三月五日(三月二三日) 中座
【演目】 妹背山・潮見桜・土蜘蛛・椀久末松山・人買船
【役者】 中村鴈治郎・尾上梅幸・中村雀右衛門・市川右團次
歌舞伎年表大阪編・七巻・一七一頁

- 23 大正十二年 (一九二三) 三月三十一日 (四月二一日) 中座
 (七七四/二二七/二二二)
 【演目】 楼門五三桐・うたかた・寿門松・黒手組助六・奴道成寺
 【役者】 実川延若・中村雀右衛門・市川右團次・嵐吉三郎
 歌舞伎年表大阪編・七卷・一八三頁
 (七七四/二二七/二二三)
- 24―1 大正十二年 (一九二三) 五月三日 (五月二四日) 中座
 【演目】 傾城酒顛童子・高時・土屋主税・淡路町心中・羽衣
 【役者】 中村鴈治郎・市川中車・中村雀右衛門・中村福助
 歌舞伎年表大阪編・七卷・一九七頁
 (七七四/二二七/二四一一)
- 24―2 同右公演 小番付 (口上)
 歌舞伎年表大阪編・七卷・一九七頁
 (七七四/二二七/二四一一)
- 25 大正十二年 (一九二三) 七月二一日 (八月一日) 中座
 【演目】 太平記曠鏡・山に入る・奴道成寺・五大力恋緘
 【役者】 中村扇雀・市川小太夫・片岡秀郎・中村福太郎
 歌舞伎年表大阪編・七卷・二三三頁
 (七七四/二二七/二五)
- 26 大正十三年 (一九二四) 九月二〇日 (二十三日間)
 御霊文楽座
- 27 大正十三年 (一九二四) 十月二四日 (二十四日間)
 御霊文楽座
 【演目】 加賀見山田錦絵・名筆吃又平・明烏六花曙
 【役者】 (竹本津太夫)・竹本土佐太夫・豊竹古靱太夫・竹本鍛太夫
 義太夫年表大正編・二〇六頁
 (七七四/二二七/二六)
- 28 大正十五年 (一九二六) 一月二〇日 (一月二九日)
 浪花座 (大衆演劇 新声劇)
 【演目】 出発前・死の狼谷
 【役者】 山口俊雄・守住菊子・小笠原茂夫・三好榮子
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五〇九頁
 (七七四/二二七/二八)
- 29 大正十五年 (一九二六) 二月一六日 (二月二五日)
 浪花座 (大衆演劇 新国劇)
 【演目】 白野弁十郎・義士間新六
 【役者】 澤田正二郎・橘光造・野村精一郎・澤みわ子
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五二二頁
 (七七四/二二七/二九)
- 30 大正十五年 (一九二六) 四月一七日 (松島八千代座)

- 【演目】 笹野権三名鎗伝・ひらかな盛衰記・義経千本桜
 【役者】 嵐佳笑・嵐徳三郎・実川延状
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五四二頁
 (七七四/二二七/三〇)
- 31 大正十五年 (一九二六) 五月八日、松島八千代座
 【演目】 新明からす・関取千両幟・鎌倉三代記
 【役者】 嵐徳三郎・嵐佳笑・片岡門童
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五五〇頁
 (七七四/二二七/三一)
- 32 大正十五年 (一九二六) 五月八日、(五月二十七日)
 天満八千代座
 【演目】 仮名手本忠臣蔵
 【役者】 嵐佳笑・嵐徳三郎・市川荒二郎・片岡門童
 ※ 五段目「写真連鎖」。
 六段目「斧定九郎 片岡仁左衛門 紀念撮影活動写真御覧に入申候」
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五五二頁
 (七七四/二二七/三二)
- 33 大正十五年 (一九二六) 九月一日、御霊文楽座
 【演目】 伊賀越道中双六・近頃河原達引・伊勢音頭恋寝
 刃
 【役者】 竹本津太夫・竹本土佐太夫・豊竹古鞆太夫・鶴
 澤道八
 義太夫年表大正編・二四〇頁
 (七七四/二二七/三三)
- 34 大正十五年 (一九二六) 十月三〇日、
 松島八千代座(当ル十一月興行宣伝ビラ)
 【演目】 (昼の部) 岩見重太郎・伽羅先代萩・双蝶々曲輪
 日記
 【演目】 (夜の部) 大黒屋長次郎・菅原伝授手習鑑・与話
 情浮名横綱
 【役者】 嵐佳笑・嵐徳三郎・嵐璃徳・片岡門童
 ※ 「絵入り役割番付」では昼の部最後の演目が「橋
 本」。
- 35 昭和二年 (一九二七) 三月一日、天満八千代座
 (七七四/二二七/三四)
 歌舞伎年表大阪編・七卷・五九八頁
 【演目】 伽羅先代萩・菅原伝授手習鑑・名工柿右衛門・白
 浪五人男
 【役者】 嵐徳三郎・片岡長太夫・嵐璃徳・市川海老十郎
 歌舞伎年表大阪編・七卷・六四〇頁
 (七七四/二二七/三五)
- 36 昭和二年 (一九二七) 六月一日、天満八千代座
 【演目】 塩原多助経済鑑・中将姫古跡松
 【役者】 嵐佳笑・片岡松太郎・片岡門蔵・実川延童
 歌舞伎年表大阪編・七卷・六六五頁
 (七七四/二二七/三六)
- 37 昭和二年 (一九二七) 六月一日、松島八千代座
 【演目】 久米平内・老後の政岡・高山彦九郎・道中膝栗
 毛

- 【役者】 嵐徳三郎・片岡長太夫・片岡門童・嵐巖右衛門
歌舞伎年表大阪編・七巻・六六六頁
(七七四/二二七/三七)
- 38 昭和二年(一九二七) 九月一日〜(九月二三日) 浪花座(実川延若一座)
【演目】 三右衛門の売出し・怪談乳房榎
【役者】 実川延若・阪東寿三郎・市川蝦十郎
歌舞伎年表大阪編・七巻・六八二頁
(七七四/二二七/三八)
- 39 昭和二年(一九二七) 十二月一日 中座(曾我廻屋五郎一派)
【演目】 嫁入前・風の夜・若き妻・秋波の威力・山崎街道
【役者】 曾我廻屋五郎・曾我廻屋十五・曾我廻屋蝶六
歌舞伎年表大阪編・七巻・六九九頁
(七七四/二二七/三九)
- 40 昭和三年(一九二八) 六月二日〜六月二七日 角座
【演目】 (昼の部) 石川五右衛門・双蝶々曲輪日記・曾我
 綉侠御所染
【演目】 (夜の部) 相馬の金さん・実録先代萩・姫山姥
【役者】 中村扇雀・片岡我童・嵐徳三郎・市川右團治
歌舞伎年表大阪編・八巻・四六頁
(七七四/二二七/四〇)
- 41 昭和三年(一九二八) 七月三二日〜(八月一五日) 浪花座
【演目】 活動狂時代・女中難・鬼あざみ・ウムベルト・ノ
- 42 昭和三年(一九二八) 八月一七日〜八月二三日 中座(伎芸座第三回公演)
【演目】 姫競双葉絵草紙・晒女・心中万年草・傾城と石橋・夕涼空住吉
【役者】 中村市郎・中村鴈之助・片岡我久之助
歌舞伎年表大阪編・八巻・五五頁
(七七四/二二七/四二)
- 43 昭和三年(一九二八) 十月八日〜(十月一八日) 京都南座
【演目】 赤穂義士録・艶姿女舞衣・道行初音鼓
【役者】 中村扇雀・中村福太郎・中村政治郎
歌舞伎年表京都編・八巻・六五八頁
(七七四/二二七/四三)
- 【役者】 林長二郎・筑波雪子・石河薫・市川九團次
歌舞伎年表大阪編・八巻・五三頁
(七七四/二二七/四二)
- ※ 本資料は絵入役割番付。「歌舞伎年表大阪編」は大阪朝日新聞広告による記載
- 注
- 1 沢井万七美「初代中村鴈治郎年譜稿」(『歌舞伎 研究と批評』二一「特集 初代中村鴈治郎の位置」(一九九八) 等を参照。
- 2 水落潔「市川右太衛門インタビュー」 映画黄金時代と歌舞伎(『演劇界』一九九六年一月号「特集 歌舞伎役者の日本

映画史)。なお歌舞伎と映画の関係については、『歌舞伎 研究と批評』三一「特集 歌舞伎と映画」(二〇〇三)等も参照。

(受付日：二〇一四年二月一〇日)

On the Forty-three kinds of Kabuki Banzuke of Osaka 1919-1928

AKIMOTO Suzushi

Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University

Abstract

ここに紹介するのは、大正8年から昭和3年までの大阪の芝居の絵入役割番付43種である。本学図書館に寄贈するにあたり、目録と共に資料の紹介を行い、近代歌舞伎や近代演劇などの研究資料として活用されることを願う次第である。

本稿では次の3つの側面を中心にして紹介する。第1はこの時期、東京の歌舞伎界が歌舞伎座を中心に災害で混乱していたことであり、第2は近松門左衛門の200年忌の記念行事の時期にあたることである。さらに第3として歌舞伎と大衆演劇・活動写真（映画）などの関係などについても考えたい。

The Forty-three kinds of Kabuki Banzuke of Osaka with pictures, from 1919 to 1928, which are all donated to the University Library by the author, are discussed in this article. The discussion focuses on the three facets of the situation surrounding the Banzuke. First, the period between 1919 and 1928 was an era when the Tokyo kabuki scene was still struggling in the chaos after the Kanto Earthquake. Second, the period coincides with the two hundred-year memorial of Chikamatsu Monzaemon, a prominent playwright in the Edo period. Finally, one could analyze the Banzuke in the light of the relationship between kabuki and the popular theater or movies.

キーワード：演劇資料、文楽、近松門左衛門、中村鴈治郎、日本映画

Key Words: theater material, Bunraku, Chikamatsu, Nakamura Ganjiro, Japanese movie

Author's E-mail Address: akimoto@shoin.ac.jp